日刊 動労千葉

86. 1. 23

No. 2146

国鉄千葉動力車労働組合
千葉市要町二一一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五～六・（公衆）〇四七二（22）七二〇七

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉砕！

こんなペテンや恫喝に屈するものか！

空声だけの『余剰人員対策』デマ宣伝

＝第二波進撃→国鉄ゼネストの予兆におびえあわてる中曽根＝

昨年十二月十三日の閣議で「国鉄余剰人員対策の基本方針」が決定されて以来、「進路アンケート」調査、マスコミを使った連日の「余剰人員キャンペーン」など、あたかも「分割・民営化」が決定され、あとはその結果生み出される「余剰人員問題の解決」が残された問題であり、それも着実に進展し、このままでもなんとかなるかのデマとペテンが横行している。これは、まさに、国鉄労働者を分断し、闘う心を奪い、屈服を引き出さんとする卑劣極まりない攻撃だ。これをまかり通らせてはならない。「61・3ダイ改」阻止の第二波闘争で断固反撃しよう。

闘うか、動労革マルの道を歩むのか 二つに一つだ

一体、いつ、どこで「分割・民営化」が決まったのか。「悪者」の汚名を着せられ、ムシケラのごとく扱われ、あげくに国鉄から叩き出される―しかも〝職を世話してやるんだから有り難く思え〟とばかりのことを一体、国鉄労働者がいつ承認したんだ。

これほど国鉄労働者を愚弄した話しがあるか。これを受け入れた瞬間に労働者は奴隷の道、地獄への道へと引きずりこまれてしまう。

動労「本部」革マルを見よ。「鉄労に御指導をお願いする」と言いなし、スト放棄、合理化推進をかかげ、生み出された余剰人員は（自らの組合員を）組合が積極的に出向、一時帰休に追いやり、退職勧奨もやるというところまでいきつくのだ。

何の展望もない余剰人員対策

そもそも「余剰人員対策」の現実はどうだ。政府・当局によれば、希望退職二万人は関連企業、旧国鉄四万一千人は、三万人が国・地方自治体・二万一千人が民間に、新会社へ三万二千人を最初から「過員」でつける。というのである。

しかし、関連企業は、六二年四月までに八千人しか確保できないことが明らかになり、かつ当然のことだが、関連企業の労働者（OB）の玉つき解雇が大問題となっている。あわてた当局は、公的機関の「前倒し採用」分も希望退職の受けざらとするとしているが、六一年度採用は、欠員補充程度であり、一万数千人の労働者（希望退職者でも就職あっせん対象は53才以下）は何の展望もない。しかも、関連企業に行ったとしても年収二〇〇万以下というのである。これでどう生活するのか。

中曽根を倒さない限り、労働者の未来はない

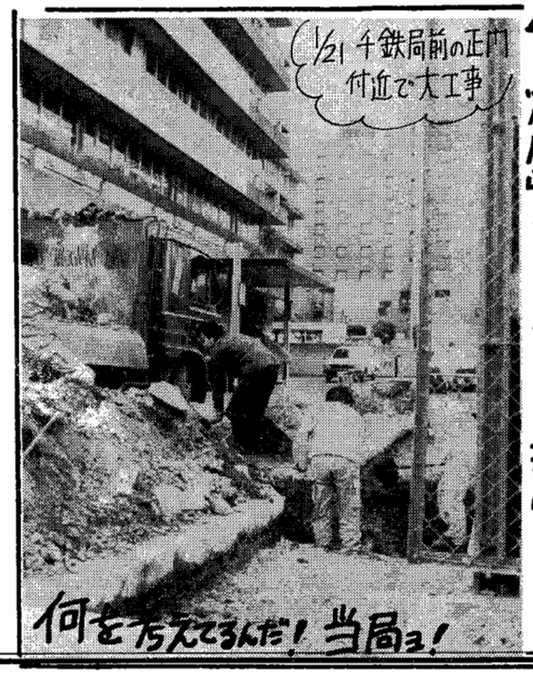
公的部門も東京・千葉・埼玉等が応じているものの、都道府県は現業部門が少ないうえ、行革の定数抑制で明るい見通しはない。新会社への過員も、買店等へ行くのがせいぜいというのだ。どこに展望があると言うのだ。これが「分割・民営化」の結論だ。何が〝雇用確保〟だ。全くのペテン、労働者を屈服させるためだけのエサなのだ。

われわれが確認せねばならないのは、われわれ国鉄労働者が屈服し「分割・民営化」が強行されるようなことがあれば、日本の労働運動がつぶされ、権利も何も全て奪われ、中曽根政治がまかり通ると言うことだ。これでは、たとえどこに行っても奴隷の道以外なくなる。これが許せるか。

これをうち破る決戦こそ三月第二波だ。一切の反動・弾圧をはねのけ、怒りの第二波へ起て。

大量不当処分粉砕 臨戦体制に突入せよ！

わが正義の第二波ストの衝撃は、今すさまじい勢いで全国の国鉄の仲間の共感と決起を呼び起している。敵は、この波及力におびえ、わが「第二波」をつぶさんと、今、常軌を逸した大量不当処分を画策している。切迫する報復処分攻撃に即日、実力撃を加え、力強く「第二波スト」へ進撃すべく、全員臨戦体制に入ろう！（具体戦術は、別途指示のとおり）



↓「鳥小屋」のつぎは、「ざんごう掘り」か!?

全組合員・家族の強固な団結で組織破壊攻撃を粉砕せよ！